

特集

病院のカウンセリング機能

「病院のカウンセリング機能」という、これまでほとんど論じられることのなかったテーマが本誌の特集に取り上げられることは、ある意味で画期的なことではないかと思っている。しかもこのテーマは、日本の医療や病院を考えていくうえで、今後非常に重要なものとなっていくのではないかと筆者自身は認識している。

カウンセリング機能という時、それは様々な意味を持ち得るものである。最も広くは、患者あるいはその家族が医療従事者に対して行う「相談」を幅広く含むものとなるし、狭くは精神科領域における精神療法などを主に念頭に置いて言われる場合もあるであろう。またこれらの中間に位置するものとして、患者や家族が病気の過程で直面する様々な心理的な不安や、退院後のことなどに関する「心理的・社会的サポート」を意味する場合もある。

確かなことは、こうした様々なカウンセリング機能が、これまでのわが国の医療において、十分な位置付けや重要性を与えられてこなかったことであり、また、こうしたカウンセリング機能に対する患者側のニーズと、医療者あるいは病院側が実際に提供できるサービスとの「乖離」が相当程度大きくなっていることではないだろうか。

その背景には、基本的な医療観・病気観や医学教育のあり方と並んで、診療報酬などを含めた医療システムあるいは医療政策上の問題がある。

こうした「病院のカウンセリング機能」というテーマに関する現状がどのようになっている、また諸外国ではどのような対応が行われており、そして今後こうしたカウンセリング機能についてわが国の病院や医療システムはどのように対応していけばよいのか、これを多様な視点から見えていくことが本特集の内容である。また、病院経営やサービスという観点から見れば、こうしたカウンセリング機能を充実させた病院こそが、患者から評価され発展していくという時代に今後確実になっていくと思われる。

本特集がそうした新たな議論への出発点や叩き台となることを願っている次第である。

(広井 良典)